
とある科学と音激道

仮面ライダーディケイドウルフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学と音激道

【Nコード】

N7421S

【作者名】

仮面ライダーディケイドウルフ

【あらすじ】

前世の記憶が全く無い主人公は響鬼さんから名前を受け継ぎ学園都市の平和を守る。

とある科学と最強の鬼（前書き）

駄文ですみません！

とある科学と最強の鬼

吉の巻き

受け継がれる鬼

く??

俺、死んだのか？

？「やっと気がついたか？」後ろには30歳ぐらいの男の人が立っていた。

？「貴方は誰ですか？」

俺は男の人に聞いてみた。？「俺かい？俺は『日高仁志』またの名を仮面ライダー響鬼だ！」

仮面ライダー響鬼！

思い出した！

俺が始めて好きになった仮面ライダーだ！

？「え、響鬼さんで良いんですよね？」

俺は戸惑いながら聞いた。響鬼「別に好きな呼び方で良いぜ！」

響鬼さんは笑顔でそう言った。

？「俺死んだんですか？」

響鬼さんは真面目な顔で「ああ！確かに死んだぜ！」響鬼さんがそう言った後に目から涙が出てきた。

？「すみません！泣くつもりは無かったですけど！本当にすみません！」

俺は謝り続けた。

しかし響鬼さんは俺の頭を優しく擦った。

響鬼「お前の行ってみたい世界に転生させることが出来るが試してみるか？」

響鬼さんの一言で俺は行ってみたい世界を考えた。

俺は決めた行ってみたい世界を！

響鬼「決まったか？」

俺は頷いた。

行きたい世界は科学が発展した世界に！

響鬼「お前に渡したい物があるから待ってる！」

響鬼さんは木箱から響鬼変身アイテムの音角とディスクアニマルそしてアームドセイバーを俺に渡してくれた。

響鬼「俺の名前を受け継いでくれないか？」

響鬼さんの突然の発言に俺は十秒ぐらい硬直した。

？「でも！響鬼さんの名前を受け継ぐなんて！」

本当なら嬉しいことだ。

響鬼「後はお前に任せるぜ！少年！」

響鬼さんは俺に力強く握手をした。

？「響鬼さん！ありがとうございます！」

俺は大声で挨拶をした。

響鬼さんは光の中へと消えてしまった。

俺が目を閉じると学園都市の中に居た。

響鬼「此所が学園都市か！広いな〜！」

響鬼さん！

見ててください！

僕は響鬼さん見たいに強い鬼になって見せます。

しかし本名を捨てて響鬼さんの名前を受け継いだんだ学園都市でも頑張るぜ！

今俺は女の子から逃げてます！
何でかって？

話しは簡単だ。不良から女の子を助けてやるかなと思って助けたら案の定常盤のエース御坂美琴だった。

美琴「待ちなさいよ！！」
今にも電撃が飛んできそうな勢いです。

響鬼「しつこいですよ！」
俺は走りながらそう言った。

美琴はいきなり電撃を俺に放った。
響鬼「マジかよ！」

迫り来る電撃はまるでヘビのようだった。
いくらなんでも滅茶苦茶だ。

すると誰かが俺の前に立って美琴の電撃を打ち消してくれた。
それから10時間後。午前7時10分場所は学生寮今俺は食事を済ませて学校まで走って行った。

場所は変わって教室！

担任「皆に重大な報告がある！」
クラスの生徒達はざわめつく。

担任「転校生を紹介する。入れ！」

俺が入って来た瞬間男子の何人かが「女子だぜ！ヒヤッホー！」とほざいていた。

担任「そこ、うるさいぞ！」しかし響鬼さんからは名前を受け継がれたけど苗字は考えてないや。

響鬼「坂本響鬼です！残り2年間よろしくね」
笑顔でそう言った瞬間クラスの女子と男子が「か、可愛い！あれが

男子何て嘘だろ！」「こいつらは失礼にも程があるだろ。一時間目は数学だったがついつい眠りこけてしまった。生徒A「先生！坂本が居眠りをしてまゝす！」男子の一人がチクつたらしい。担任「坂本！」先生がチヨークを投げてきた。しかし俺は音角をディスクアニマルに当てた。響鬼「何ですか？ふあああ！」あくびをしながら狼のディスクアニマルの頭を撫でた。担任と他のクラスメイトも驚いていた。担任「坂本…そのロボットは何だ？」俺は姿勢を正して普通に答えた。響鬼「ただのおもちやですよ！」それをだけを言った。

「放課後」

帰りの仕度を済ませて学校の校門の前で奇妙な声が聞こえた。

？「うゝいゝはゝるゝ」

髪の毛の長い女の子は頭に髪飾りをした女の子のスカートを捲っていた。

？「ん？ひい！ひゃあああ！何するんですか佐天さん！！」

あの長髪が佐天か！

髪飾りをしている子が初春だな！

そんなことを認識していた俺は初春がスカートを捲られた時にちらりと水色のが見えた気がした。

佐天「ごめん、ごめん！」初春「真面目に謝ってくださいよ！もゝ！」

顔を膨らませる初春、それを宥める佐天の姿を少し楽しそうに思えた。

初春「佐天さん！今日の授業驚きましたよね！？」

何の話をしているのか気になったので聞いてみた。

響鬼「何の話をしているの？」

俺が佐天に聞いた。

佐天「え〜と？確か坂本君だよな？」

何故に疑問系！

初春「佐天さん！ちゃんと覚えてあげてくださいよ！すみません！

坂本さん！」 初春は親切に謝った。

話の内容は俺がディスクアニマルを使ったのに驚いたらしい。

今から俺の歓迎会をしてくれるらしい。

そんな話をしていると嫌な気配を感じた。

響鬼「悪い佐天さん、初春さんちよつと用事を思い出した。」

俺は鞆を持って自分の寮に帰った。

〈佐天〉

どうしたんだろ？

初春「佐天さん今からセブンスミストに行きましょうよ！」

初春がセブンスミストで買い物を言ってきた。

佐天「良いね！今月欲しい水着があつたんだ。」

新しい水着を買いたかつたから丁度よかった。

バスに揺れて30分後セブンスミストに到着した。

初春「あ、佐天さん！」

佐天「どうしたの？初春！？」私の目の前を道着を着た坂本が走っていた。

〈響鬼〉

まさか、魔化魍がセブンスミストの最上階に居たとはな。

響鬼「見つけたぜ！魔化魍！」

そこには童子と姫が居た。

童子「鬼か？」

姫「私達の邪魔をしに来たのか？」

二体の魔化魍は俺に攻撃を仕掛けてきた。

佐天「坂本！何やってんの？」

響鬼「佐天何でお前が此所に居るんだよ！」

姫は魔化魍の姿に変身した。

佐天「か、怪物？」

佐天は目の前で化けた魔化魍に腰が抜けたらしい。

響鬼「佐天！早く逃げる！」俺は音角をディスクに軽く叩いてタカとオオカミのディスクアニマルを土グモの童子と姫に向かって投げた。

響鬼「今の内に逃げる！」

佐天の腕を掴んで屋上の隅に隠れるように言った。

佐天「待ってよ！坂本は怖くないの？あんな化け物と戦うのが！」

響鬼「怖いよ！でもな、逃げるのが一番怖いんだ！」響鬼さんが前に言った事を真似した。

響鬼「行ってくるぜ！シユ！」

指をチヨキにして魔化魍の方へ歩いていった。

音角を指で鳴らした。

響鬼「お前達をこの世界の好きなようにはさせない！」（キイイイイイーン！）

額に近づけて体から炎が包み込んだ。

響鬼「行くぜ！」

童子と姫は口から蜘蛛の用な糸を吐き出した。

その糸は俺の体に巻き付いた。

すると階段の隅に居る筈の佐天が俺の体に巻き付いた蜘蛛の用な糸を誰かが落としたライターで焼き切ってくれた。

響鬼「佐天！お前何やってんだ！」

後ろから童子と姫が攻撃してきた。

響鬼「とにかく早く隠れてろ！」

俺は腰に装着した音激棒を掴んで童子と姫に叩きつけた。

響鬼「行くぜ！鬼人無双！！」童子と姫が二人同時に攻撃を仕掛けてきた瞬間にカウンターに鬼神無双を打った。

二体は枯れ葉が散りながら爆死した。

響鬼「気分爽快！」

俺はそう言っつて佐天の方へゆっくりと歩いた。

響鬼「佐天さん大丈夫か？」俺がそう聞くと佐天は笑顔でこう言っつた。

佐天「全然大丈夫！」

こいつが死んだら悲しむ奴が居るだろうしな。

すると地面の下から土グモが姿を現した。

響鬼「こんな時に厄介な奴が出てきたな！」

音激棒を手で回しながらそう呟いた。

響鬼「行くぜ！うらあー！」音激棒の先端から鬼火を放った。

土グモの顔面にクリティカルヒットした。

佐天「やった？」

響鬼「いや、まだだ！」

俺が首を左右に降つてそう言っつた。

土グモはゆっくりと起き上がり屋上のフェンスに体当たりして屋上百メートルから真つ逆さまに落ちていった。

響鬼「ヤバイな！佐天さんは此所に居る！」

俺も高いところからジャンプした。

「初春」

初春（佐天さん、何処に行つたんですか？）

私がそう思っつた。

すると上から巨大なクモが落ちてきた。

初春「な、何これ？」

するとクモがゆっくりと起き上がり私を睨んできた。私は腰が抜けてしまった。初春（誰か助けて！）

右目から涙を流しながらそう思っつたその時。

？「猛士式・二の型」

クモの頭を鬼の様な人がキックを決めた。

？「大丈夫か？」

私の肩を掴んで聞いてきた。

初春「あ、はい！大丈夫です！」

私はそう言った。

（響鬼）

響鬼（やれやれ！初春が居るとか聞いてないんだけどな！？）

土グモは横に倒れている隙に音激鼓を土グモの体に取り付けた。

響鬼「行くぜ！音激打・火炎連打の型！」

その太鼓は響鬼さんから教えて貰った必殺技を土グモに連続で打ち込んだ。

響鬼「終わりだ！」

最後の一発を打ち込んだ瞬間に土グモの体は爆死した。

響鬼「流石に土グモは良いとして空中の魔化魍はどうにもできないな！」

そう言っていると後ろから初春がこっちに向かって歩いてきた。

初春「あの！先程はありがとうございました！」お辞儀をする初春に俺はこう言った。

響鬼「気にするな！じゃあな！」

いつものポーズで学生寮に戻った。

時間が過ぎて夜へ、

アームドセイバーの手入れと音激棒の手入れそして音激鼓の手入れをすませてゆっくりと布団に入って眠りに入った。

つづく

とある科学と最強の鬼（後書き）

次は何を書くかな？

新たな敵（前書き）

作っていたら眠くなりました！
続きです！！

新たな敵

響鬼

今僕は異常に眠い。

理由は簡単さ、深夜になると夜行性の魔化魍が出没するからだ。

そのパトロールをしたりディスクアニマルの調整や改良をしたりと寝る時間はたったの一時間しかない。眠い体を起こして学校へ向かった。

僕がバスに乗って揺れる事10分後。

響鬼（やつぱり眠いや！）

そう思いながら歩いていると後ろから誰かが抱きついてきた。

響鬼「いきなり何ですか？初春さん！」

犯人が初春さんだとすぐに解る理由は体が小さいのと気配でわかった。

佐天「すごいね！坂本！一発で誰か解るなんて！」

佐天さんが僕の後ろから感心していた。

響鬼「佐天さんが考えたイタズラですか？」

僕が呆れた顔でそう言った。

初春「佐天さんが考えたイタズラってワンパターンですからね！」

初春さんが苦笑いしながらそう言うのと佐天さんは初春さんに、

佐天「何ですって！初春！！」佐天さんは初春さんの頬つぺたを軽くつねった。

初春「いらいへふよ！ふあてんさん！（痛いですよ！佐天さん！）」

初春さんは少し笑顔でそう言った。

響鬼「二人とも早くしないとチャイムが鳴るよ！」

僕はそう言っつて鞆を持って教室まで走った。

一時間目は体育

響鬼さんから教わった訓練メニューを昨日三時間もしていれば体育は家で掃除をしているようなものだ。初春さんの方を見ると完全にバテていた。響鬼「初春さんは体力が無いんですか？」

僕がそう聞くと初春さんは息を荒くしながらこう言った。
初春「ハアハアはい！私は体より頭を使う方なんです！坂本さんは体を使う方なんですか？」

初春さんから質問が返ってきた。

響鬼「う〜ん！？どちらかと言えば前は頭を使う方だったな！」
響鬼さんに力を授かる前は記憶は無いけど。

佐天「初春もバテバテだね！私もあまり平気じゃないけど！」

佐天さんの額には汗が少しだけ汗が着いていた。

〜放課後〜

明日から終業式に入るからか皆は浮かれていた。

僕は浮かれる事があまり出来ない。

夏になると夏だけの魔化魍が出没するからだ。

響鬼「はあー！明日は訓練メニューを夏専用に変えないといけないな！」

そう独り言を言っていると後ろから誰かが背中を叩いてきた。

佐天「何暗い顔してんの？坂本響鬼くん！！」

いつもの事だけど犯人が佐天さんなのはすぐに解る。

響鬼「佐天さん！痛いですよ！」

僕は今にも涙目になりそうになった。

初春「佐天さん！あんまり坂本さんをいじめないでください！」

初春さんは真剣な顔で言ってくれた。

響鬼「佐天さんと初春さんは今日は暇なの？」

僕がふとそう聞いた。

初春「はい！私は暇ですよ！佐天さんは？」

初春さんは佐天さんに聞いた。

佐天「私もかなり暇だよ！」

佐天さんはOKサインをだした。

初春「あ、坂本さん！」

いきなり初春さんが僕を呼んだ。

響鬼「何？初春さん？」

初春「能力測定やりましたか？」

僕は十秒程固まった。

響鬼「あ、忘れてた！」

佐天「いや、普通忘れないでしょ！」

佐天さんの切れの良いツツコミが返ってきた。

初春「やっぱり！先生が坂本さんに渡して置くようにと言われたの

で今から常盤台中学に行きますよ！」

初春さんはいつもよりきらきらしていた。

佐天「うわ〜！行く気満々満々だね！」

僕と佐天さんは二人で初春さんを見て苦笑した。

（常盤台中学）

初春「着きましたね！」

まだきらきらしていた。

僕は研究者の人にプールで待っているように言われたので音激棒を鞆から取り出した。

プールの方を見ると女の子がコインを右手に飛び込み台に立っていた。

響鬼（あ、今から使うのかな？）

僕がそう思った瞬間プールから物凄い爆音がした。

研究者「時速マツハ3、威力10t、レベル5」

あの短髪の女の子凄いな。

研究者「次の人どうぞ！」

次は僕の番だな。

響鬼「はい！坂本響鬼！行きます！！！」

音激棒を二本持って目を閉じた。

すると鬼石から炎の剣が現れた。

響鬼「ハアア！音激剣一の型、炎の斬撃！」

サメのヒレの様な形をした炎がプールの水に当たった。

総合している研究者達は目が震えていた。

研究者「坂本響鬼くん！威力8t、熱量8900！レベル5」

それには流石の僕でも驚いた。

初春&佐天「ええええええー！！」

確かに驚いた。

響鬼「終わったなら帰っていいですか？」

僕が首を傾げると研究者達は頷いた。

そのあと初春さんが目をきらきらしたのは言うまでもない。

初春「はあく！憧れのレベル5がこんな身近に居たんですね！」

初春さんは目を輝かせてそう言った。

佐天「確かにね！」

佐天さんは少しだけ苦笑いをしていた。

響鬼「佐天さんは超能力者に憧れてるの？」僕がそう聞くと。

佐天「全然！私はレベル0でも楽しければ良いの。」

でもその表情はとても悲しそうだった。

響鬼「あ、今からどっかに遊びに行こうよ！」

少しだけ空気が気まずくなったので僕はそう言った。初春「あ！す

みません坂本さん！」

いきなり初春さんが謝り始めた。

佐天「何かあるの？」

佐天さんが初春さんに聞いた。

初春「はい！私の知り合いの白井黒子さんが常盤台の御坂美琴さん

に会わせてくれるんですよ。」

また初春さんのオーラがキラキラしていた。

響鬼「僕も行つていい？」

僕がそう聞くと初春さんは目を輝かせながら頷いた。初春「もちろ

んです！！」待ち合わせの喫茶店」

響鬼「待ち合わせ此所なんだよね！？」

僕が初春さんに聞くと初春さんは何故か顔を真っ赤にしていた。

響鬼「初春さん？」

初春さんの見ている方向を見ると知らない女子二人が抱きついてい
るのかは不明だが何かをやっていた。

そして初春さんが教えてくれた白井黒子さんに会えた。

白井「紹介しますの！私と同じ風紀委員「ジャッジメント」の初春
ですの！」

初春「初春飾利です！憧れの御坂さんに会えて光栄です！」

また初春さんの目がキラキラしていた。

白井「そして、え〜と？」

佐天「ども〜初春の親友の佐天涙子です！どういふ訳か付いてきち
やいました！因みにレベルは0で〜す！」

ふざけて挨拶をする佐天さんだった。

響鬼「さかも「坂本響鬼でしょ？」何で知ってるんですか？」

僕は御坂さんに聞いた。

御坂「知ってるも何も学園都市第4位を知らない訳が無いでしょ！」

響鬼「誰が4位何ですか？」

御坂「あんたよ！」

御坂さんは僕に指を指して言った。

響鬼「僕が第4位？本当何ですか？」

僕が御坂さんに近付いて聞いた。

御坂「ち、近いわよ顔が！／／／」

響鬼「すみません！」

一応謝った。

すると後ろから殺気を感じた。

響鬼「白井さん殺気は辞めてください！！」

滅茶苦茶怖かった。

「クレープの店へ」

御坂さんがクレープ食べに行こうと言ったので僕はすぐに御坂さん
の両手を掴んでこう言った。響鬼「賛成です！！」

佐天「速答！なら私も！」

初春「はい！私もです！白井さんは？」

白井さんは僕を睨みながら賛成した。

響鬼「クレープ」

御坂「あんたクレープ好きなの？」

御坂さんが聞いてきた。

響鬼「うん 大好きですよ！甘い物はかなり好きですよ」

満面の笑みで答えた。

御坂「そ、そう／＼／」

御坂さんは顔を赤くしてそう言った。

初春

坂本さん好きなの甘い物が好きなんだ。

店員「お待たせしました。ご注文は？」

坂本さんはメニューを選んだ。

響鬼「え〜と！イチゴの生クリーム&チョコレートクリーム味をお願いします！」

坂本さんは私より目を輝かせてそう言った。

店員「申し訳ありませんがゲコ太ストラップはこの人で最後何です！」

そう店員さんが言った瞬間に後ろにいた御坂さんが膝を付いて呟いていた。

初春「御坂さん？大丈夫ですか？」

響鬼

響鬼「御坂さん！ストラップ要りますか？」

僕が御坂さんに聞くと御坂さんは目を輝かせた。

美琴「良いの？」

僕は頷いた。

響鬼「良いですよ！僕が持つても仕方ないしね。」

御坂さんは頭を下げてありがとうと言った。

ベンチで待っていた白井さんと佐天さんの方へ向かった。

響鬼「お待たせ！」

僕は佐天さんにクレープを渡した。

佐天「ありがとう！」

みんなでクレープを食べながら喋った。

御坂「どうした？の初春さん？」

御坂さんが初春さんに聞いてきた。

すると初春さんは銀行の方を向いていた。

初春「まだ閉店する時間じゃありませんよね？」

僕もそう思った。

響鬼「確かに変だね！」

そう言った瞬間いきなり銀行のシャッターが爆発で吹っ飛んだ。

煙の中から銀行強盗が三人出てきた。

強盗1「早くしろよ！！」

強盗2「わかってんよ！」

銀行強盗達は金が入ったバックを車に乗せて逃亡しようとした。

白井「風紀委員「ジャツジメント」ですよ！」白井さんが強盗の前に立ちそう言った。

響鬼「暇だから僕も加勢してくるよ！」

僕は御坂さんにそう言って白井さんの方へ向かった。 響鬼「白井さん僕も戦うよ！訓練ついでに！」

両腕に鬼の力を集中した。 響鬼「僕が2人やるから白井さんはも

う2人の方を頼んだよ！」

白井「仕方ありませんわね！はあー！」

白井さんは僕が使えるかすぐにわかったみたいだ。

強盗1「お前に俺達が捕まると思ってるのか？」

強盗2「まさか風紀委員「ジャツジメント」も人で不足か？」

僕は後ろから汚い声で笑った2人が白井さんにボコボコにされていた。

強盗3「こいつは風紀委員「ジャツジメント」じゃないから俺達でも倒せるぜ！」
強盗4「ああ！こいつなら俺達でも倒せるぜ！」
2人の強盗は俺に殴り掛かってきた。

響鬼「やれやれ！20%の力で戦うか！」

そう言つて強盗の腹に回し蹴りと正拳突きが綺麗に決まった。

強盗は地面に腹を抱えて倒れ込んだ。

響鬼「強すぎたかな？」

頭を掻きながらそう僕は呟いた。

すると強盗の一人が右手から火炎弾を白井さんに向けて放った。

強盗1「死ねや！」

しかし白井さんは火炎弾を上手く回避した。

白井「無駄ですよ！私に当てようなんて千年以上掛かりますの！」

響鬼（さすがは白井さんと言うべきか？）

すると男は頭に来たのかポケットから何かを取り出した。

強盗1「俺を怒らせた事を後悔しやがれ！！」

それはこの世界とは無関係の物だった。

響鬼「何でお前がガイアメモリを持っているんだ！」

俺がそう言った瞬間強盗はガイアメモリのスイッチを押した。

「マグマ！」

ドーパント「へへへ！！貴様らじゃ俺を倒せないかもな！」

ドーパントの不気味な笑いに他の人達は避難した。僕は音角をポケットから取り出した。

しかし変身しようにも初春さん達が見ているので変身できない。

続く

新たな敵（後書き）

ガイアメモリが何故この世界に？
次回あの人登場！

主人公紹介（前書き）

主役のイメージは作者のイメージです！

主人公紹介

名前・坂本響鬼

身長・153?

体重・45?

年齢・13歳

趣味・己を鍛えること、お菓子を作ること。

職業・中学生「笹川中」、鬼

好きな事・

甘い物を食べる事、自然の音を心に刻むこと。

嫌いな事

友達を傷つける奴、

魔化魍

響鬼が皆をどんな風に思っているか・

御坂美琴

響鬼「うっん！始めて会った時いきなり勝負しろって言われたな！でも二度目に会った時は優しい人って始めて知ったかな！」

白井黒子

響鬼「初めての出会いが御坂さんに抱き着いてたからあつちの人がと思った！でも御坂さんを信頼してるしてるから大丈夫かな？」佐天涙子

響鬼「見た目は大人の女性なのに初春さんのスカートをよく捲って

る気がするな？ 明るいし僕がピンチの時助けてもらったな！ イタズラ好きなのがたまに傷かな？ でも初春さんの大親友だから大丈夫な筈かな？」

初春飾利

響鬼「頭に着けてた髪飾りの花が本物が偽物が聞きたかったけど聞くのは今度にしたな。小さいのに風紀委員ジャケットまでやってるから凄いな！ 僕が鬼だと解っても友達だよな？ 僕と同じで甘い物は別腹って言うってたな。」

以上

変身アイテム・

変身音叉？ 音角？

武器・

音撃棒・烈火

音撃鼓・爆裂火炎鼓

師匠・

響鬼

ほんの短い時間坂本響鬼を鍛えた最強の鬼！
今は響鬼の世界で魔化魍と戦っている。

キャラクターのCV

髪型は坂本美緒

顔付きは友兼（GA 芸術家アートデザイナークラス！！）髪の色はストライクウィッチーズ宮藤芳佳と同じで少し茶色が入っている。

しかし怒った場合髪ツバサクロニクルの毛の色は赤と黒が混ざる前の色になる。瞳の色は黒鋼の色に似ている。

以上です！

主人公紹介（後書き）

ありがとうございました。また読んでください！

ありがとう(前書き)

お待たせしました。

ありがとう

〱 前回のあらすじ

坂本響鬼は学校の帰りに初春達と常磐台中学に能力測定の帰りに御坂美琴と再会した響鬼はお近づきの印にクレープの販売所でゲコ太ストラップを渡した。

初春は銀行がまだ2時前なのにシャッターが閉まっているのに気になつた。

〱 御坂

佐天「また化け物!？」

御坂「佐天さんまたつて前にもあつたの？」

私が佐天さんに聞くと佐天さんは頷いた。

初春「佐天さん!大丈夫ですよ!またあの鬼見たいな人が助けに来てくれますよ!」

御坂「鬼見たいな人?」

私が首を傾げた。

初春さんの話では昨日出現したクモの様な怪物を鬼見たいな人が倒したらしい。

〱 響鬼

白井「かは!」

ドーパントの火炎弾が白井さん腹部に直撃した。

響鬼「白井さん!」

僕は白井さんの側に駆け寄る。

気絶しているだけだった。

響鬼「お前だけは許さない!」

僕は音撃棒・烈火を両手に掴みそう言った。

ドーパント「はあ?お前が俺に勝てるかよ!あの世に行きなクソガキ!」

ドーパントは僕に突進を仕掛けてきた。

響鬼「御坂さん！初春さん！佐天さん！白井さんを連れて安全な所に避難して！」

僕がドーパントの攻撃を交しながらそう言う。

御坂「ふざけた事言ってるじゃないわよ！あんたを置いて行けると思っ？」

御坂さんは大声でそう言った。

響鬼「僕なら大丈夫だから早く逃げて！」

ドーパントの頭を烈火で叩きながらそう言った。

佐天「了解！」

佐天さんが親指を立ててそう言った。

初春「佐天さん！坂本さん一人じゃ殺されますよ！！」

御坂「そうよ！佐天さんは坂本を殺す気？」

二人が焦りながらそう言った。

佐天「大丈夫ですよ！坂本には強い力がありますから！」

佐天さんは白井さんの肩に頭を入れて御坂さんと初春さんにそう言った。

響鬼「僕は本気を出す気は全く無いんだけど！お前は僕の親友を傷つけた！さあ！お前の罪を数える！！」

僕の怒りは頂点に達していた。

僕は腰に持っていた音叉・音角を掴んで指で音角を軽く鳴らした。

「キイイイン！」

僕の体は炎に包まれて仮面ライダー響鬼に変身した。

響鬼「これが僕の本当の姿だ！」

ドーパントは僕に火炎弾を四発発射した。

ドーパント「死にやがれ！化物！」

僕は火炎弾を音撃棒・烈火で火炎弾を打ち落とすとした。

響鬼「お前は僕を甘く見すぎた様だな！」

僕は音撃鼓・爆裂火炎鼓をマグマドーパントの体に取り付けた。

響鬼「喰らえ！！音撃道・爆裂強打の型！！」

たった三発しか叩いていないのにドーパントはかなり吹っ飛んだ。

響鬼「メモリブレイク完了!!」

皆を守るために僕は戦うと決めた。

強盗「貴様！何でそんな力を持っている!!」

強盗は僕に聞いてきた。

響鬼「仲間を守る為だ!!」

僕は普通に答えた。

強盗「仲間の為かよ！俺はこの力で俺を見下してた能力者達を皆殺しにしたかった！」

強盗はそう言った瞬間に僕は強盗の頬を殴った。

響鬼「殺したかった！ふざけるな！あんたが人を殺して良い理由なんて無いだろ！少しは周りの事を考えてやれ!!」

僕は強盗に説教しながらそう言った。

数分して警察「アンチスキル」到着した。

とある路地裏

響鬼「取り合えず着替えを持ってこさせるか！」

音角をディスクアニマルに当てて空中に投げた。

響鬼「着替えを持ってきてくれ！」

アカタカは頷いて家に向かった。

響鬼（こういう時しか使っていないような気がするな!?!）

僕はそう思いながらアカタカが帰ってくるのを待っていた。

？「やっぱり貴方だったんですね！坂本さん！」

僕が後ろを振り向くと初春さんが後ろに立っていた。

響鬼「何時そこに居たの？」

僕が恐る恐る聞いてみた。

初春「3分前からです！」響鬼「築かれないようにしてたんだけどな！」

僕が頭を掻きながら初春さんにそう言った。

初春「あの、坂本さん！」

響鬼「何？初春さん！」

いきなり初春さんが僕の唇と初春さんの唇が重なった。

初春さんの唇はとても柔らかくてとても温かった。響鬼「な、なな、何するの！？初春さん！」

僕は何時以上に慌てた。初春「す、すす、すみません！」

初春さんも僕と同じくらい慌てていた。初春「あの！坂本さんはどうしてあの怪物と戦うんですか？」

確かにどうして戦うのかなんて今思い出しても僕には解らなかった。

響鬼「どうして戦うのか？簡単だよ！皆を守りたいんだ！」

響鬼さんから教えてもらったのが強い体と優しい心だ。

響鬼「初春さん！お願いしても良いかな？」

僕が初春さんに聞くと初春さんは頷いてくれた。

響鬼「僕が鬼つて御坂さんと白井さんに教えないでね！」

僕は指を口に近づけて内緒だよと言った。

初春「はい！わかりました！響鬼さん！」

響鬼「初春さん！何時から僕を響鬼さんつて言うようになったの？」

僕が質問したら初春さんは顔を赤くしてこう言った。初春「す、

すす、すみません！何だか下の名前の方が呼びやすいのかなと！？」

初春さんは顔を真っ赤にしながらそう言った。

僕が響鬼さんつて言われたのは初めてだった。

響鬼「あ！今アカタカが帰ってくるから後ろ向いててくれる？」

初春「はい？」

初春さんが後ろを振り向いた瞬間に鬼の甲冑を解いて服を着た。

響鬼「もう良いよ！」

僕がそう言うのと初春さんはゆっくりと振り向いた。

初春「あれ？響鬼さん学生服は？」

響鬼「実はね鬼に変身すると服が炎で燃えて無くなっちゃうんだ！」

僕が頭を掻きながらそう言うのと初春さんはまた顔が赤くなっただけに気絶までした。

そのあと僕が初春さんを運んだのは言うまでもない。

^UJ

ありがとう(後書き)

初春大胆だ!!

不幸の少年と音激の少年（前書き）

あの人に来てしまった。

不幸の少年と音激の少年

く??

わたくし上条当麻は大漁の不良集団から逃げております。

上条「不幸だー!!」

そう言いながら走り回ってとある橋の近くに着いた。

上条「ハアハア！もう来ないな！だけど可笑しいないきなり不良集団が着いてこないな！」

俺がそう言った瞬間後ろから誰かの声が聞こえた。

？「不良から少女を助けて教師ですか？」

後ろには学園都市第三位のビリビリ中学生御坂美琴がそこに居た。

上条「まさか、不良が追いかけて来なくなったのって？」

俺が恐る恐る聞いてみるとビリビリはこう言った。

御坂「馬鹿にしないでレベル0の調理法ぐらい心得てるわよ！」

俺はファミレスでビリビリに絡んできた不良集団を助けたつもりなんだがどうやらこいつにやられてしまったらしい。

上条「お前あんまり上から人を見下さない方が良いぞホントに！」

俺が普通に忠告した瞬間ビリビリの体から電流が流れていた。

御坂「まったく！まるで強者の台詞よね!!」

ビリビリ今にも電撃が飛んできそう何ですが。

上条「待てよ！俺もレベル0!!」

俺はそう言ったがビリビリは電流を球を投げるように俺に放った。すると何処からか髪の毛の長い女の子が太鼓を叩く棒でビリビリの電撃を空に打った。

？「御坂さん！何やってるかと思えばこんな所に居たんですか？」

口調からして男の子だと解った。

しかしビリビリの電撃を打ち返すとはな。

？「あの大丈夫ですか？」

男の子は俺に手を差し出した。

上条「あ、ああ！サンキューな！」

手を掴んで俺は立ち上がった。

上条「さつきはありがとな！」

一応俺は命の恩人かは知らないが助けてくれた男の子の手を握りお礼を言った。上条「俺は上条当麻！お前は？」

俺が少年の名前を聞いた。

？「坂本響鬼です！」

坂本響鬼が完全に男の名前だな。

上条「そうか、俺は当麻って呼んでくれお前は何て呼んだら良いんだ？」

俺がそう訪ねると坂本はこう言った。

響鬼「響鬼で良いですよ！」

上条「そうか、よろしくな響鬼！」

俺がそう言った瞬間ビリビりは俺と響鬼に電撃を放った。

御坂「私を無視してんじゃないわよ！」

俺は右手を突きだしビリビリの電撃を打ち消した。

「パアアン」

響鬼「当麻先輩今のは一体？」

響鬼が驚いた顔をしていた。

上条「ああ！俺の右手は異能の力なら何でも打ち消せるんだ！」

俺の右手はそのせいで不幸の連続だ。

響鬼「凄いですね！」

上条「凄こくねーよ！この右手のせいで不幸の連続何だぜ！」

右手を見ながら俺はそう言った。

（響鬼）

そんな強い力が在るなんて初めて知った。

御坂「だから！無視すんなや！！コラー！」

御坂さんの雷が上から落ちてきて僕に直撃した。

僕が気絶をしたのは言うまでもない。目が覚めたのは20分後だっ

た。

上条「やっと起きたか？」

目を覚ますと上条さんがファミレスのイスに腰を駆けてそう言った。

響鬼「あ、はい！」

御坂「ごめんね！坂本！」何時横に居たのか解らないが御坂さんが横に居た。

響鬼「別に構わないですよ！」

僕がケータイを出して御坂さんに見せた。

御坂「あ、忘れてた！」

ケータイの内容はこう書いてあった。

御坂（晩御飯奢るからファミレスに来てくれない！）

これのために僕は御坂さんの待ち合わせ場所に来たけど来ないから適当に探したら御坂さんが上条さんを追っているのを見つけた。

響鬼「好きなの選んで良いんですか？」

僕は目をきらきらしながら御坂さんに聞いた。

御坂「ええ！良いわよ！」

御坂さんは笑顔でそう言った。

（御坂）

御坂（しかし約束したのを忘れてた私って一体？）

私は額に手を当ててそう思っていた。

（上条）

上条（ビリビリの奴何で頭を抱えてんだ？）

俺はドリンクバーで入れてきたコーラを飲みながら見ていた。

しかし響鬼は笑顔でメニューを選んでいた。

こいつの考えてることが解らない。

しかしビリビリの親友に会って解つたのは高能力者って事だな。

そう思っていると響鬼の頼んだ料理が来た。

上条「響鬼一つ聞いて良いか？」

俺が聞くと響鬼は笑顔で「何ですか？」と答えた。

上条「頼みすぎたる！」

響鬼の頼んだメニューはエビグラタンと地獄ラザニアとパンケーキ大盛りとドリンクバーと食後のチョコレートパフェを見ながら俺はツツコミを入れた。

御坂「私もツツコミたかつたわ！」

ビリビリも同じ考えだったらしい。

しかしこの体で良く入るよな。

御坂「しかし良く食べるわよね！」

ビリビリも同じ事を考えているとは。

上条（しかしこいつはどうして柔道の服みたいなのを着てるんだ？）俺がふとそんな事を思った。

こいつがビリビリの電撃を弾き返した太鼓のバチの先端は鬼の形をしてるな。

上条「なあ！お前の持つてる太鼓のバチは鬼の形をしてるけど響鬼の能力で作ったのか？」

俺がそう聞くと響鬼は食べるのを止めて少し暗い顔でこう言った。

響鬼「これは僕の師匠から免許皆伝の証として受け取ったんです！」

響鬼は自分の右腕を俺とビリビリに見せた。

それはこいつがどれだけ頑張ったのか解るぐらいの生々しい傷の跡だった。火傷や刃物で切られた跡みたいだ。

こいつは師匠の訓練に耐えて強くなっただんな。

ビリビリもレベル1から努力してレベル5に成ったって聞いた事が有った。

こいつの力は皆の為に使ってたんだよな。

響鬼のバチを見ていたら中を見て驚いた中身は木で出来ていた。

（響鬼）

響鬼「美味しかった！ごちそうさまでした！！」

僕は何時もの様に帰ろうとしたら御坂さんが僕の手を掴んできた。

響鬼「何ですか？御坂さん？」

僕は御坂さんに聞いた。

御坂「あたしと勝負しなさい！」

御坂さんの標的は上条さんだけじゃなくて僕も入ってるのかな？

響鬼「嫌って言ったら？」

僕が恐る恐る聞いたら御坂さんは怖い顔でこう言った。

御坂「やるの！」

怖いよ御坂さん！

とある川の近く

あまり人も来ないから僕は此所を選んだ。

響鬼「何時でも良いですよ！」

僕が音激棒・烈火を両手に掴んでそう言った。

御坂「だったら！遠慮無く行くわよ！」

御坂さんの電撃が蛇の様に襲い掛かってきた。

僕は烈火で電撃を弾き返した。

御坂「やっぱり電撃は効かないか！なら！」

御坂さんは地面に弱い電流を流して黒い何かが出てきた。

響鬼「御坂さん？何ですかそれ？」

僕が恐る恐る聞いてみると御坂さんは僕にこう言った。

御坂「砂鉄が震動してチェインソー見たいになってるから触れると

ちよつと血が出たりするかもね！」

響鬼「殺す気ですか？御坂さん！」

僕が真つ先にツッコミを入れた。

御坂「そのつもりは無いけどね！」

御坂さんは砂鉄の剣を連続で斬りつけて来た。

音激棒・烈火で砂鉄の剣の攻撃を防ぐ僕はどうするべきか考えた。

ある事を僕は考えた。

響鬼「そつちが砂鉄なら僕は炎の剣だ！！」

僕は音激棒・烈火の先端に鬼の力を注いで炎の剣を造り出した。

砂鉄の剣と炎の剣がぶつかり合った。

砂鉄の剣は僕の炎の剣で溶けて無くなった。

響鬼「僕の勝ちだね！」

僕がそう聞くと御坂さんはこう言った。

御坂「見たいね！悔しい〜な〜！！！」

御坂さんは涙目になりながらうじうじしていた。

上条「終わったか？」

上条さんが頭を掻きながらそう聞いてきた。

響鬼「あ、はい！」

僕がそう返事した。

川の近くを後にして帰ろうとした。

その時いきなり嫌な気配を感じた。

上条「どうした？響鬼？」

上条さんが僕にどうしたか聞いてきた。

御坂「坂本？」

僕の勘が正しかったらアンノーンの可能性が高い気がした。

僕は走り出した。

誰かが傷つくのを見たくないから僕は戦うのを選んだ。

御坂「ちよつと！坂本？」

上条「響鬼何処に行くんだ？」

二人の声が聞こえたけど僕は無視してその音のする方に走った。

〜上条〜

上条「ビリビリ！響鬼を追うぞ！！！」

俺がそうビリビリに言うのとビリビリは顔を赤くして頷いた。

あいつがいきなり走り出したのは気になった。

上条（もしかして！響鬼の奴何かと戦ってるのか？）

確信は無いが俺はあいつを見失わないように俺達は後を折った。

〜響鬼〜

走って着いた場所は路地裏に着いた。

前を見るとゼブラロードとオクトパスロードが常磐台の生徒を襲い

掛かっていた。

常磐台生徒A「誰か助けて!!」

常磐台の生徒が助けを求める声を聞いた瞬間に僕は音角を軽く壁に叩いて返信した。

常磐台生徒B「ん？貴方は？一体？」

一人の女子生徒は僕に聞いてきた。

響鬼「俺かい？仮面ライダー響鬼だ!!そんな事より二人共早く逃げろんだ!!」

音激棒でアンノーンの体に炎の玉を投げた。

炎の玉は二体に命中した。

常磐台生徒の二人は隙を見て上手く逃げた。

後はアンノーン2体を倒すだけだった。

アンノーン2体は同時攻撃を仕掛けてきた。

響鬼「僕を甘く見るな!!」

烈火を振り回してアンノーン2体の腹部に思いっきり叩きつけた。

路地裏を出てセブンスミスとの近くに出た。

僕は空中の回し蹴りが上手く決まった。

オクトパスロードの頭をヘッドロックして口から鬼火を放った。

後からゼブラロードの攻撃を仕掛けてきた。

僕はオクトパスロードをゼブラロードに向かって岩石を投げるようにしてぶん投げた。

音激棒・烈火を軽く指で回しながら弱いと思いつつ考えていると

オクトパスロードのムチが僕の首に巻き付いた。

響鬼「ぐあああ!!」

苦しい今の僕の力はこの程度なのか？

響鬼さんが此所に居たら何て言うだろう。

薄れ行く意識の中僕は響鬼さんが目の前に現れた気がした。

響鬼「よう!少年!元気にしてたか？」

響鬼さんが本当に居た。

坂本「響鬼さん!?!どうして？」

僕が不思議にそう思っているとオクトパスロードとゼブラロードが

攻撃を仕掛けてきた。

響鬼「話しは後だ！お前はこんな所で寝ている暇なんて無いだろ？」
響鬼さんが本当に居てくれた。

坂本「響鬼さん！はい！僕と響鬼さんの最強タッグの実力を見せてあげましょう！」

僕が響鬼さんにそう言つと響鬼さんは「ああ！とことんやるうぜー！」と言つた。

響鬼「ハアアアア！」

響鬼さんは音激鼓をゼブラロードの腹部に取り付けた。

僕も音激鼓をオクトパスロードの腹部に取り付けた。

響鬼&坂本「音激打・爆裂強打の型！！！」

2体のアンノーンは爆死した。

息がびつたりあつた。

同時の音激は僕も初めてやつた。

響鬼「よう！少年元気にしてたか？」

響鬼さんが僕の頭を撫でながら元気が聞いてきた。

坂本「あ、はい！」

僕は少しだけ涙が出てきた。

久しぶりに会つた響鬼さんは前と変わつてなかった。響鬼さんが何故とある科学の世界に来たのか僕が聞くと響鬼さんはこう言つた。

響鬼「お前が心配でな！」

その優しさで僕は何度も救われた。

上条「響鬼大丈夫か？」

上条さんが走りながらそう言つた。

御坂「坂本大丈夫？」

御坂さんも同じだった。

坂本「二人共どうしてそこに居るの？」

僕が聞くと二人は僕を追い掛けてきたらしい。

響鬼さんの事を明日紹介すると二人に教えた。

帰宅した。

続
く

不幸の少年と音激の少年（後書き）

どうでしたか？

オリキャラ（前書き）

響鬼のサポート役だな！

オリキャラ

名前、宮沢勝人

年齢、13歳

身長、165?

体重、43?

趣味、本を読むこと、

好きな事、大事な人の笑顔と好きと言ってもらえること

嫌いな事、大事な人を傷付ける奴、途中で諦める奴。

キャラクターのモデル

顔付き

岡崎朋也「CLANNAD」

髪形

井ノ原真人「リトルバスターズ！」より少し短め！

髪の色

少しだけ金髪「地毛」

キャラクター説明

何時も大切な人としか一緒にいないためか他の奴等からもよく絡まれる。

喧嘩は以上に強い。

そしてあの仮面ライダーに変身する。

オリキャラ(後書き)

どうぶつごんごん

優しさの少女と強さの青年（前書き）

6月5日から何週間か入院します。

優しさの少女と強さの青年

「初春」

はあ〜！

最近響鬼さんに顔を見ただけで胸がドキドキする。

その原因は私が響鬼さんにキスをしたことです。

初春「今度響鬼さんに会ったら謝まらないといけませんよね！」

そう思いながら歩いていると道の真ん中で誰かが倒れていた。

初春「大丈夫ですか？」

倒れていたのは私より小さい女の子だった。年齢から見ても多分小学五年生くらいだと思う。

初春「しつかりしてください！」

念の為に風紀委員「ジャッジメント」177支部まで背負って行くとしたけど私にそんな体力があるわけがなかった。

初春「こんな時響鬼さんが居てくれたら！」

私は女の子を背中に背負ってゆっくり歩きながらそう思った。

響鬼「初春さん？」

後から響鬼さんの声が聞こえた。

初春「ひ、響鬼さん？」

私はいきなり響鬼さんが後から現れたのでびっくりした。

響鬼さんに何が起こったか説明した。

響鬼「成る程ね！つまり初春さんが買い物帰りにその子が倒れていたんだね！」

響鬼さんがそう聞いた。

初春「はい！今から風紀委員「ジャッジメント」第177支部に行つてこの子の身元を調べてみます！」

私は響鬼さんにそう言った。

響鬼「なら僕がその子を背負って行くよ！」

響鬼さんは笑顔でそう言った。

初春「いいんですか響鬼さん？」

響鬼さんは頷いて女の子を背中に背負って歩いた。

〈十分後〉

私と177支部に到着した。

響鬼「初春さん！この子ソファーに寝かせておくよ！」

響鬼さんは女の子をソファーにゆっくり寝かせた。

私はパソコンで女の子の身元を調べた。

初春「ありましたよ！響鬼さん！」

私が響鬼さんに報告した。

響鬼「本当？初春さん！」

響鬼さんはパソコンの画面を見た。

初春「女の子の名前は小早川ゆたか！能力レベルはレベル？で能力名は治癒力「ケアル」？って書いてあります！私達と同じ笹川中の一年生です！」

私が響鬼さんにそう報告した。

響鬼「そうなんだ！」

小早川さんの荷物から何かが落ちた。

初春「写真と何かの入れ物ですね？」

中にはカードがたくさん入っていた。

響鬼「これ、確か土さんの！」

響鬼さんの表情が少し変わった。

初春「響鬼さん？」

一枚のカードと睨み会っていた。

響鬼「まさかね！」

そう響鬼さんは言った。

初春「響鬼さん！毛布要りますか？」

私が毛布を持って響鬼さんに要るか聞いた。

響鬼「うん！要る！」

響鬼さんはそう言った。

〜次の日〜

初春「うん？ふああ！」

朝の日差しが眩しかった。

響鬼「おはよう！初春さん！朝ごはん食べる？」

響鬼さんがエプロンを着て朝ごはんを作ってくれた。

初春「響鬼さんがこれ作ったんですか？」朝ごはんのメニューは白米と卵焼きと味噌汁とほうれん草のお浸しだった。

響鬼「うん！」

響鬼さんが料理上手なんて意外だった。

初春「いただきます！」

まずは卵焼きを一口食べた。

響鬼「どう？」

響鬼さんが味はどうか聞いてきた。

味は言うまでもなく。

初春「美味しいです！！！」

それを響鬼さんに言うと響鬼さんは笑顔で「よかった！」と言った。

響鬼さんの腰には相変わらずバチを持っていた。

初春「響鬼さん、そのバチは？」

響鬼さんはバチを指で回しながらこう言った。

響鬼「このバチはね、僕の大先輩が僕の為に作ってくれたんだ！」

響鬼さんは笑顔でそう言った。

響鬼さんの先輩って誰なのかな。

（響鬼）

響鬼さんの就職先を探すために外に出たら初春さんが女の子を背負っていたから気になったんだよな。

？「うん？ふああ！」

小早川さんが目を覚ました。

響鬼「初春さん！小早川さんが目を覚ました見たいですよ！」

僕が初春さんにそう言った。

初春「本当ですか？」

初春さんは小早川さんの近くに駆け寄ってこう言った。

初春「あの、突然ですみませんが！小早川さんはどうしてあんなところで倒れていたんですか？」

初春さんは小早川さんに質問をした。

小早川「探してる人がいるんです！探してくれませんか？」

小早川さんは涙目になりながらそう言った。

響鬼「どんな人ですか？」

小早川さんは名前を教えてくださいました。

小早川「宮沢勝人君、私の大切な人です！」

小早川さんの言った宮沢勝人をどんな人かはわからないけど僕と初春さんは頷いて探すと言った。

白井「おはようございます！って坂本さんもいらしゃったんですのね！」

白井さんと御坂さんと佐天さんも到着した。

佐天「おはよう！うーいーはーるーん！」

また佐天さんは初春さんのスカートを捲っていた。

初春「ひ、ひゃああああ！佐天さんいきなり何をするんですか！」
相変わらずだな。

御坂「所でこの子は？」

御坂さんは小早川さんを指差した。

小早川「小早川ゆたかです。よろしく願いします！」

お辞儀をする小早川さんに御坂さんは顔を赤くしながら「よろしくね！小早川さん！」と言った。

白井「所で宮沢勝人の事は聞いた事がありますわ！」

響鬼「本当ですか！？白井さん！」

僕が白井さんに質問した。

白井「ええ！確か宮沢勝人、残虐で冷酷な最凶最悪の不良「スキルアウト」ですよ！」

白井さんが低レベルの人を見るような目でそう言った。

だけど小早川さんは泣きそうな顔でこう言った。

小早川「違います！！勝人君は冷酷でも残虐でも無いです！！勝人君は私を何時も守ってくれて優しくしてくれたんです！！」

それを聞いた白井さんは呆れた顔でこう言った。

白井「しかし現に何人も被害者が出てますわよ！宮沢勝人が犯人と警察官「アンチスキル」が言っていましたわよ！」

そう言った白井さんの後ろに御坂さんは白井さんの頭に踵落としを決めた。

白井さんの目がペケになっていた。

〈小早川〉

響鬼「気にしなくていいよ！宮沢さんも小早川さんの事探してるよ！」

響鬼さんは私にそう言った。

初春「あの！この写真の右の人が勝人さんですか？」

私が持っていた写真を見た初春さんはそう言った。

この写真は私と勝人君が旅立つ前の友達と別れる前に撮った写真だった。

私は涙を流しながら写真を見つめていた。

（響鬼）

初春「白井さん！これを見てください！」

初春さんが白井さんと呼んだ。

白井「これは不良「スキルアウト」三人が第七学区で警察官「アンチスキル」と交戦中！しかも警察官「アンチスキル」が苦戦してます！」

響鬼「え！？警察官「アンチスキル」とたった三人の不良「スキルアウト」にアンチスキルが苦戦してるの？」

僕がそう聞くと初春さんは頷いた。

僕は音激棒・烈火を持って現場まで走っていた。

（第七学区）

（??）

警察官「つち！かなりまずいじゃんよ！」

黄泉川先生が不良の人数を見た。

警察官B「人数は三人なのにどうして？」

不良三人は内ポケットからメモリースティックを取り出した。

不良A「行くぞ！テメーら！！！」

不良B&C「へい！兄貴！」

メモリーのスイッチを押して変な音声が流れた。

「ガトリング！」

「ランチャー！」

「ライフル！」

不良三人が怪人化した。

黄泉川「全員銃の弾を実弾に変えろ！」

黄泉川先生の命令に警察官「アンチスキル」の皆は銃の弾を実弾に

交えた。

黄泉川「撃てー！」

全員が化け物に向かって狙撃した。

黄泉川「攻撃止めー！」

攻撃を中止する黄泉川先生の命令に皆は攻撃を止めた。

しかし化け物は平気そうにしていた。

警察官B「そんな！全然効いてない！」

私はあまりの恐怖に腰が抜けた。

マシンガンドーパント「死にやがれ！」

私達に銃の弾が私達に襲い掛かってきた。

？「鬼神覚醒！！！」

紅い竜巻が銃弾の機動をずれた。

？「今のは一体？」

私がそう思っていると後ろから男の人の声が聞こえた。

？「大丈夫か？」

鬼のようなパワードスーツを着た人が私達を助けてくれたみたいだ。

？「あ、はい！」

私はそう返事した。

く??

何処に行ったんだ？

？「しかしやけに下がうるさいな！」

俺は下を見るとドーパント三体と警察官「アンチスキル」が交戦していた。

？「此所もヤバイな！」

取り合えず階段から降りてあいつを探るか。

？（何処に行ったんだ？ゆたか！）

そう思いながら一階に到着した。

響鬼

僕は今第7学区の方へ走った。

現場に着くと響鬼さんがアームド響鬼の姿で戦っていた。

響鬼「響鬼さん！」

僕は響鬼さんの元へ走った。

響鬼アームド「少年！」

響鬼「響鬼さん！僕も戦います！」

変身・音角を指で軽く触れて変身した。

体に炎が燃え上がった。よく三体のドーパントの形を見ると遠距離の攻撃タイプだった。

響鬼アームド「行くぞ！少年！」

響鬼さんは僕にそう言った。

響鬼「はい！僕がライフルのドーパントの相手をします！」僕は響鬼さんにそう言った。

響鬼アームド「なら頼んだぞ！」

僕は頷いてライフルドーパントの方へ走った。

響鬼「うおおお！」

僕は獣の様な大声でライフルドーパントの体に烈火のバチを炎の剣に変えて攻撃をした。

ライフルドーパントは両腕にライフルが装備していた。

ライフルドーパント「消えな！」

ライフルドーパントはライフルで攻撃を仕掛けてきた。

響鬼「あまい！」

僕はライフルの弾を叩き斬った。

ライフルドーパント「何？」

ドーパントの体に爆熱火炎鼓をドーパントの腹部に取り付けた。

響鬼「喰らえ！火炎連打の型！！」

何十回も火炎鼓を叩いた。

ライフルドーパント「ぐあああ！」

爆発したライフルドーパントは人間の姿に戻った。

響鬼「ふう！やっと倒した！」

僕は音檄棒・烈火を持ちながら響鬼さんの方を見た。

響鬼アームド「鬼神覚醒！！」

アームドセイバーから放った鬼神覚醒で2体のドーパントを秒殺した。

響鬼「響鬼さん！終わった見たいですね！」

僕が響鬼さんに近付いてそう言った。

響鬼アームド「ああ！終わった見たいだ！」

響鬼さんもそう核心した。

しかし後ろから大きな剣が響鬼さんを攻撃してきた。

剣の大きさ5mは有りそうなかさだった。

響鬼「響鬼さん！！」

僕は響鬼さんに近付いた。響鬼アームド「少年心配するな！俺は大

丈夫だ！」横腹には血が大量に出ていた。

いわゆる出血だ。

？「大丈夫か？」

金髪の男の人が響鬼さんの傷を見た。

？「つち！こんな時にゆたかが居てくれたら！」

僕は目を疑った。

響鬼（この人がゆたかさんの大切な人宮沢勝人さん！？）

すると御坂さん達が第7学区に来た。

小早川「勝人君！」

小早川さんは宮沢さんを見て大きな声で呼んだ。

勝人「ゆたかか？」

宮沢さんは小早川さんの方を向いた。

勝人「ゆたか悪いがこの鬼の治療を頼んだ！あとお前に預けたあれ

を投げてください!!」

響鬼（あれってまさか!）

小早川さんは荷物の中から門矢士さんが変身するときに使っていた
デイケイドライバーとライドブツカーを宮沢さんに投げた。

勝人「ありがとな!」

そう言つて腰にデイケイドライバーを装着した。

勝人「変身!」

響鬼さんの友達で世界の破壊者つて言われた仮面ライダー。

「カメンライド!デイケイドウルフ!」

だけど僕の知っている仮面ライダーデイケイドとは全然違う。

デイケイドウルフ「行くぜ!ハアアア!」

デイケイドは走り出してライドブツカー「ソードモード」で敵に斬
りかかった。

続く

優しさの少女と強さの青年（後書き）

響鬼「貴方が宮沢勝人さん？」

御坂「あんた私と勝負しなさい！」

白井「お二人のあの姿を説明して貰いますわよ！」

初春「あの響鬼さん…！」

佐天「あの！私を弟子にしてください！」

小早川「お帰りなさい！勝人君！」

勝人「俺はゆたかを守り続ける！」

響鬼「久しぶりだな！斬鬼さん！」

天と雷

オリジナル仮面ライダー（前書き）

Aチャンネル面白い！

オリジナル仮面ライダー

名前・仮面ライダーディケイドウルフ！

全長・198？

体重・72？

パンチ力・9t

キック力・15t

仮面ライダーカード・
1号からオーズまで使用可能！

アタックライドカード・
主に使うアタックライドカード名！
アタックライドスラッシュ！

アタックライドブラスト！

アタックライドアイスクロー！

キャラクターカード・

勝人とゆたかがあらゆる世界を旅した時に仲間の友情のカードで変身や呼び出すことも可能！

私用武器・

ライドブツカー！

必殺技・アイスデイメンションキック

破壊力1000t

時速マツハ120

最強フォーム・

コンプリートフォーム

クウガからオーズまでの最強フォームを呼ぶ出す事が出来る！

デストロイフォーム

デイクイドウルフの完全無敵最凶フォームで残酷で冷酷な残虐フォーム！

普段はゆたかが管理をしている。

強さはオーズのプトティラコンボの十倍もある。

何故かゆたかが抱き着くと変身が解ける。

私用バイク・

ウルフデイクイダー！

勝人の愛車で普段はライドブツカーの一番後ろに入れてある。

最高時速は980？

水中でも陸上でも空中でも私用可能。

オリジナル仮面ライダー（後書き）

また見てください！

出会い（前書き）

4人の仮面ライダー登場

出会い

（デイケイド）

俺は見覚えのないドーパントと戦っている。

ドーパント「グオオオ！」

こいつの大きさは前に見たことがある。

ドーパント「グルルル！」

思い出した。

フェイトノステイナイの世界で出てきた。

デイケイド（バーサーカ…かよ。）

俺はライドブツカーから三枚のカードを取り出した。

デイケイド「皆、力を貸してくれ！」

デイケイドライドバーに三枚のカードを入れてライドブツカーをガンモードに切り替えた。

「キャラクターライド！宮藤芳佳！坂本美緒！セイバー！」

撃った瞬間に三人の女がそこに立っていた。

？「お久しぶりです。宮沢さん。」

茶髪で短い髪をしていてストライクウィッチーズの世界で俺とゆたかに優しくしてくれた宮藤芳佳が俺に頭を下げてそう言った。

？「久しいな宮沢！随分と遅しくなったな。」

眼帯を右目につけた女性は俺と訓練に付き合って貰っていた。

腕を組ながら俺にそう言ったのは坂本美緒。

ストライクウィッチーズの世界の鬼教官と言われていた。

？「話をしている場合じゃ無いみたいですね。」

バーサーカは大剣で俺達に攻撃を仕掛けてきた。

凄まじい攻撃に地面に大きなヒビが入った。

デイケイド「宮藤、悪いがあっちで倒れてる鬼の治療をしてやって

くれ！」

俺はライドブツカーからまた一枚カードを取り出した。そのカードをデイケイドライダーに入れた。

「アタックライド！ブラスト」

バーサーカに目掛けて放った。

セイバー「やりましたか？」

坂本「いや、まだ死んでいない！」

俺も頷きながらそう思った。

バーサーカ「グオオオ！」

50発も放ったエネルギー弾が全く効いていなかった。

デイケイド「仕方ねえな、使いますかな。」

俺はライドブツカーからケータツチを取り出した。

デイケイド「行くぜ！」

「クウガ、アギト、龍騎、ファイズ、ブレイド、響鬼、カブト、電王、キバ、W、オーズ、ファイナルカメンライドデイケイドウルフ！」

デイケイドコンプリートフォームに変身した俺はタッチコムで一人のライダーを選んだ。

「電王、超クライマックス！」

俺の隣には超クライマックスフォームの電王が立っていた。

デイケイド「行くぜ。」

「ファイナルアタックライド！デ、デ、デ、デ、電王！」

必殺技のクライマックス切りでバーサーカの頭を真っ二つにした。

デイケイド「ふう、全く手間かけさせやがって！」

元の姿のデイケイドウルフに戻ってそう呟く。

しかし俺は忘れていた。

バーサーカの宝具の力を。バーサーカ「グルルル！」

その力は八回殺さないと絶対に死なない体だった。

？「デイケイド、力を合わせよう！」

俺の名前を言ってきたのは仮面ライダー響鬼だった。

デイケイド「ああ！」

俺は一枚のカードをライドブツカーから取り出した。

「カメンライド！アギト！」

ライドブツカーをガンモードに変形させてアギトを召喚した。

「アタックライド！烈風丸！エクスカリバー！」デイケイド「二人共受けとれ！」

坂本とセイバーの武器を召喚して二人に向かって投げた。

坂本「悪いな宮沢。」

セイバー「ありがとうございます。」

二人は自分の必殺技を同時に放った。

坂本「喰らえ！烈風斬！！」

坂本が魔法力を烈風丸に集中して放つ必殺技烈風斬。セイバー「エクスカリバー！」

二つの光の斬激が交じり合いバーサーカに直撃した。デイケイド「まだまだ、アギト連続攻撃だ！」

「ファイナルアタックライド！ア、ア、ア、ア、アギト！」

アギト「ハアアア、たあああ！」

アギトのライダーキックもバーサーカに直撃した。

響鬼「うおおお！音激道・火炎連打の型」

響鬼の火炎連打の型も決まり止めは俺が決める。

デイケイド「行くぜ。」

デイケイドライバーに一枚のカードを入れた。

「ファイナルアタックライド！デイ、デイ、デイ、デイ、デイケイド！」

アイスデイメンションキックでバーサーカのメモリを完全に破壊した。

デイケイド「ふう。」

（響鬼）

あれが仮面ライダーディケイド。

ゆたか「勝人君：」

ディケイドが振り向いて手を振りながら変身を解いた。

勝人「ただいま、ゆたか。」

宮沢さんの笑顔はとても良い笑顔だった。

ゆたか「うん、おかえり勝人君！」

ゆたかさんはそう言っただけ勝人さんに抱き着いた。

大切な人が側からいなくなるのはとても辛いことだ。

でもあの二人は心配することもないかもしれないな。

白井「感動の再会のところ悪いかもしれませんがお二人の変身した

姿について説明していただけますか？」

白井さんは鉄矢両手に持ちながらそう言った。

（風紀委員「ジャツジメント」177支部）

僕と勝人さんは自分達の変身したライダーの説明を一から説明した。

御坂「つまり坂本が変身した姿は鬼と呼ばれてる仮面ライダー？で

良いのよね？」

そう言った御坂さんに僕は頷いた。

初春「あの、響鬼さんは二人いるのが気になるんですけど。」

響鬼「初春さんが言ってるのは僕の師匠の響鬼だよ。」

僕は初春さんに一から説明した。

佐天「でも良いな坂本は鬼に変身して闘えるなんて。」

佐天さんは僕をじっと見ながらそう言った。

響鬼「いや、鬼の修業しないと鬼にはなれないよ。」

僕はアイスコーアを飲みながらそう言った。

勝人「確かそうだったな。」

勝人さんも思い出した様なポーズで言った。

御坂「それよりも宮沢勝人、私と勝負しなさい！」

出た御坂さんの勝負しなさい宣言。

響鬼「御坂さん、やめた方がいいですよ。」

僕は御坂さんに忠告した。

白井「そうですねよお姉さま！不良「スキルアウト」の宮沢さんが勝てるわけがありませんわよ。」

白井さんもそう言った。

宮沢「俺は構わないぜ。」

勝人さんは小早川さんが寝ているから静かにしてほしいみただった。

御坂「なら、川の近くに行くわよ。黒子！」

御坂さんは白井さんの力で川の近くに向かった。

〈川〉

〈御坂〉

御坂「行くわよ！」

私は電撃を宮沢勝人に放った。

勝人「やれやれ、変身！」

「カメンライド！ダイケイドウルフ！」

あれが仮面ライダーダイケイド。

直撃したのに全く効いてない。

ダイケイド「終わりか？」

勝人は私に聞いてきた。

御坂「あんた本気で闘いなさいよ！」

私は電撃を何発も放ったが効いてない。

デイケイドU「仕方ね〜な、こいつで十分だな。」

「キャラクターライド、森下こよみ！」

私はヤバイ敵かと思って超電磁砲「レールガン」を用意したけどよく見ると小さな女の子がそこに立っていた。

Dこよみ「さてと始めますか」

私は勝人向かって本気の超電磁砲を放った。

Dこよみ「悪いが、戦う気は全くない。」

そう言つて右手を前に出してヒモを引くような感じで超電磁砲「レールガン」を消した。

御坂「うそ。」

私はあり得ないと思った。

すると上から何かが落ちてきた。

それはたらいだった。

Dこよみ「悪いこいつの能力は異能の力をたらいに変換することだ。」

それつてつまり私の超電磁砲「レールガン」をたらいに変換しただけ。

Dこよみ「飽きたから帰るわ。」

「カメンライド！カブト！」

「アタックライド！クロックアップ！」

あいつはすごい早さで何処かへ行ってしまった。

（佐天）

私は今コンビニの帰りに近道をして帰ろうとしたら不良の人に絡まれました。

不良A「おい、嬢ちゃん俺達に金をくれよ。」

佐天「お金なんて持ってないですよ！」

私は不良の人にそう言った。

不良B「ならお前でも裏ルートで売れば高く買ってくれるんでな。」
もう一人の不良はそう言った。

不良A「嫌だと言ったらこいつで無理矢理にでもやらせて貰うぜ」
そう言つて不良がポケットから取り出したのはケータイだった。

不良A「早く金出せ。」

私は「嫌です」と言った。

不良A「あゝあ、なら死ねよ！変身！」

男はケータイのボタンを913と押した。

「スタングバイ、コンプリーグ！」

体に黄色いラインの坂本が変身した仮面ライダーじゃない。

カイザ「死ね！」

男はケータイのCLRボタンを押した。

「ウエリ、エクステイータータイム！」

私は逃げようとしたけど足が震えて動けなかった。

カイザ「何だ？」

上から雷と一緒に鬼が落ちてきた。

？「ん？」

私の方を少しだけ見て何かを片手に持ちながら戦い始めた。

カイザ「貴様、仮面ライダー斬鬼か？」

斬鬼「だつたら何だ？」

二人の仮面ライダーは互いの武器で闘っている。

カイザ「なら死ね！」

黄色いラインの仮面ライダーは鬼の仮面ライダーに剣で切ろうとしたが鬼のライダーはうまく交わした。

斬鬼「喰らえ、音撃斬、雷電斬新！」

鬼のライダーは自分の武器をギターの様にして黄色いラインの仮面

ライダーを撃破した。

斬鬼「大丈夫か？」

鬼のライダーは私に無事か聞いてきた。

佐天「あ、はい！」

私は無事だと言った。

斬鬼「ならよかった。」

鬼が背中を向けて帰ろうとしたとき私は決心した。

佐天「あの、弟子にしてください！」

私は鬼の人にそう言った。

斬鬼「あ？」

つづく

出会い(後書き)

あ？

倒れる鬼「前編」(前書き)

完成

倒れる鬼「前編」

（裏路地）

（響鬼）

闇の中で僕は夏の魔化網の天狗と戦っていた。

響鬼「うらあ！」

パンチを天狗の腹に五発とキックを腹に一発決めた。

響鬼「喰らえ！音撃打・火炎連打の型！！」

夏専用の姿響鬼紅に変身したいけどあれに変身するには夏の訓練を
やらないといけない。

デイケイドU「うらあ！」

勝人さんも手伝ってくれたお陰で早く終わりそうだ。

「ファイナルアタックライド！デイ、デイ、デイ、デイケイド！」

必殺技のアイスディメンションキックでカップを倒した。

デイケイドU「これで全部か？」

勝人さんは物足りないと言いたそうにしていた。

響鬼「終りだと思えますよ。」

僕は勝人さんにそう言った。

デイケイドU「つまらん。」

僕は苦笑した。

勝人「たくよ。ここ最近夏の魔化網が増えてないか？」

勝人さんは僕にそう聞いてきた。

響鬼「確かにそうですね。」
僕も同じことを思った。

夏の魔化網の出現する場所は山や川と決まっている筈なのに学園都市に大量に出現している。

勝人「響鬼、俺そろそろ帰るわ。」

響鬼「あ、はい！また手伝ってくださいね。」
僕は笑顔で勝人さんにそう言った。

小早川さんと約束してるって言ってたもんね。
帰る時の勝人さんは何だか笑って様に見えたな。

〈第八学区〉

僕は新しい魔化網が出現したと初春さんから連絡を受けて出動した。
響鬼「此所で間違いない」

音撃棒・烈火を両手に持ちながら確認した。

初春「響鬼さん、魔化網なんですけど。種類はオオナマズだそうです。」

オオナマズとは前に吹鬼さんが倒した魔化網の一種だ。

響鬼「なら気を付けないといけないね。」

すると何処からか魔化網の気配を感じた。

童子「鬼か？」

姫「我らの邪魔をしに来たのか？」

二体の魔化網はいきなり襲い掛かってきた。

僕は音角を指で鳴らして仮面ライダー響鬼に変身した。

響鬼「喰らえ!!!」

口から鬼火を放った。

童子と姫は鬼火で灰になった。

響鬼「こんなもんかな？」問題のオオナマズが何処に居るか探してみたがそれらしき影も姿も見当たらなかった。

カンカンカラン、

空き缶が転がってくる音がしたのでその音の方へ向かった。

響鬼「誰だ!」

僕は音撃棒・烈火を構えてそう言った。

出てきたのは御坂さんと白井さんだった。

響鬼「二人共どうして此所に来たの?」

僕は音撃棒・烈火を持ったまま聞いた。

白井「どうしてではありませんの。初春を借りると置き手紙を残しただけではありませんの。」

二人は初春さんが心配になってそれで着けてきたのか。

?「ふふ」

誰かの笑い声が少しだけ聞こえた。

僕は目を閉じて気配をたどった。

気配のしたのは誰も寄り付かなくなった高層ビルの中からだった。

響鬼「三人共危ないから早く帰って」

僕は音撃棒・烈火を持ってビルの中へ入っていた。

〈高層ビル〉

中に入って見ると何かの実験をしたものや他にも見たことのない物が置いてあった。

テーブルの上に大きなアタッシュケースが置いてあった。

響鬼「何だろう？」

僕はアタッシュケースの中身を見て驚いた。

響鬼「が、ガイアメモリ！」

大量のガイアメモリがそのアタッシュケースに入っていた。

？「ふふ、見つけるのが早いわね。」

後ろを振り向くと19歳ぐらいの黒い服を着た女の人が立っていた。

僕はとつさに音撃棒・烈火を掴み女の人に向けた。

響鬼「貴女は一体何者だ！」

僕は少しだけ恐怖していた。

武器を突きつけられても動じない女の人に。

？「教えてあげるわ、私の本当の姿を」

「タブー！」

ガイアメモリのボタンを押してタブードーパントに姿を変えた。

響鬼「うおおお！」

音撃棒・烈火を強く握り締めてタブードーパントに殴り掛かった。

ドーパント「ふふ、甘いわね」

右手からエネルギーの球体を僕に目掛けて放った。

僕は音撃棒・烈火で受け止めようとしたが威力がけた違いだった。

音撃棒・烈火はいとも簡単に折れてしまった。

ドーパント「ふふふ、」

今度は三発もエネルギーの球体を放ってきた。

力の差は歴然だった。

次にエネルギーの球体をまともに受けたら。

命は無い。

響鬼「負けるかー！」

片手に鬼爪を出してタブードーパントに切りかかった。

しかし空中に居るタブードーパントはうまく交わしまくる。

逆にカウンターにエネルギーの球体をまともに受けてしまった。

地面に膝が着いて変身が溶けて意識が無くなってしまった。

響鬼「ん！」

目が覚めて僕は病院のベッドの中にいた。

辺りを見回して近くで初春さんが寝ていた。

多分初春さんが誰かに頼んで運んで貰ったのかな。

響鬼「ありがとう。」

お礼を言っただけで近くに折れてしまった音撃棒・烈火の破片を見た。

響鬼さんが僕の為に作ってくれた物をドーパントがいとも簡単に破

壊したのに今でも信じられない。

僕は心に決めた。

響鬼紅に変身すると。

続く

倒れる鬼「前編」(後書き)

次の話は斬鬼を出します。

倒れる鬼 「後編」 (前書き)

敗けた話の続きです。

倒れる鬼 「後編」

響鬼

あの闘いから三日が過ぎた。

響鬼さんは今警察官「アンチスキル」で働いている。

僕は今紅に変身する為に学園都市からかなり離れた田舎に向かって
いる。

アナウンス「次は流村、次は流村です。」

降りる駅に近づいたのでお金を払って流村に到着した。

美しい自然が広がる村に僕は少しだけ涙が出てきた。

響鬼「よし、確か下宿先はこの辺りの筈だ」

地図を見ながら確認をすると後ろから知り合いの気配を感じた。

響鬼「隠れてないで、出てきてくださいよ御坂さん、初春さん、佐

天さん、白井さん」

御坂「やつぱりバレてた？」

頭を掻きながらそう言った御坂さん。

初春「すみません」

今にも泣き出しそうな初春さん。

白井「バレていたみたいですね。」

白井さんは冷静に状況を把握した。

佐天「あ、はは！」

少しだけ笑いながら出てくる佐天さん。

4人がついてきていたのは気配ですぐにわかった。

響鬼「全く4人も勝手に着いてくるなんて」

僕は4人に説教をしながら辺りを見渡した。

雨が降る可能性が高いし夏の魔化網が出現したらさすがにヤバイ。

響鬼「着いてきたんなら仕方ない。」

僕の出した決断は意外だった。

響鬼「僕は新しい力を手に入れるために修行をするからその手伝いをしてね。」

そう僕は4人に笑顔で言った。

御坂「なら特訓に付き合ってもいいの？」御坂さんは目をきらきらさせながらそう言った。

響鬼「仕方ないですからね」

僕は下宿先の家まで歩いて行った。

く下宿先く

佐天「大きい!!」

佐天さんが家を見て驚いていた。

初春「本当ですね!」

初春さんも驚いていた。

御坂「ねえ、坂本」

御坂さんが僕を呼んだ。

響鬼「何?」

僕は荷物を玄関に全部置いた。

御坂「この建物あの響鬼って人の家なの?」

御坂さんは僕にそう聞いてきた。

白井「しかし大きすぎると思いますの」

白井さんは建物中に入り何が有るか確かめていた。

響鬼「響鬼さんは好きに使っていいって言ってたから大丈夫だよ」
僕はそう言って部屋割りをどうするか考えた。

結果白井さんと佐天さんと御坂さんが同室で僕と初春さんが同室になった。

響鬼「ちよつとやることがあるから4人はご飯の用意をしてて」
僕はリュクサツクを背負って山に向かった。

初春「あの、響鬼さん私も一緒に行つていいですか？」

初春さんが僕にそう言って来た。

響鬼「僕は別に構わないけど足手まといにだけはならないですよ」
僕は初春さんにそう言った。

山には夏の魔化網が出現する可能性が極めて高い。

く山く

ロープを使い上手く登る僕だけど初春さんは慣れていないので今にも落ちそうだ。

響鬼「初春さん、大丈夫？」

僕は初春さんに声をかけた。

初春「は、はい！」

そう言った初春さんだけどこかなり疲れてるみたいだ。

僕も始めて山登りをした時はかなりキツかったな。

そんなことを思い出しながら初春さんが到着するのをまった。

初春「すみません、遅れてしまって」

謝る初春さんに僕は「気にしてないから大丈夫だよ！」そう言った。

「勝人」

響鬼の奴が紅の特訓に行つちまったから俺はマシンディケイダーで魔化網が出現しそうなエリアを見回りをしていた。

エリア4も変わりがなかったため帰宅することにした。

すると後ろから何かの気配を感じた。

それは何か怪しい気配だった。

俺は気配のする方に向かって走り出した。その気配が一番強い場所に到着した。

勝人「此処だな。」

そう呟きながら建物中に入った。

ディケイドライダーとライドブッカーを持ちながら中へ進んでいくと何かがいきなり襲いかかってきた。

それは魔化網でもドーパントでもなかった。

勝人「お前は一体何者だ!!」

俺はそいつに聞いた。

?「ハアアア、たあ!」

刃で攻撃をしてくる敵に俺は迷わず変身した。

勝人「変身!」

「カメンライド…ディケイドウルフ!!」

ライドブッカーから一枚のカードを取り出した。

「カメンライド…電王!!」

ライドブッカーをガンモードに変形させて攻撃してくる敵に向かってライダーを召喚した。

電王「へへ、俺、参上!」

お決まりのポーズをしながらそう言う電王に俺はライドブツカーからまた一枚のカードを取り出した。

「ファイナルフォームライド!!!デ、デ、デ、電王!!!」
ガンモードのライドブツカーを電王に向けて放った。

電王「ぐお?」

電王の体はイマジンのモモタロスに変わった。

モモタロス「痛く、おい最後まで言わせるよ!!!」

怒りながら俺の方に向かって歩いてくる電王。

ディケイドU「おら、行くぞ!」

俺はモモタロスを無視しながら正体不明の鎧と戦った。

モモタロス「仕方ねえ!いくぜいくぜ!!!」

同時攻撃を仕掛ける俺達に鎧はうまく攻撃を交わす。ディケイドU

「あいつまさか!」

俺はライドブツカーからまた一枚のカードを取り出した。

「キャラクターライド!!!アーチャー!!!」

Dアーチャー「試してみるか」

俺は両手を大きく広げてアーチャーの宝具を使用した。

白と黒の剣が表れた。

Dアーチャー「行くぞモモタロス!!!」

モモタロス「ああ!」

3つの剣が同時に仕掛けたら交わすのは不可能だ。

Dアーチャー「これで終わりだ!!!」

鎧の仮面が破壊され戦っていたのは斬鬼の師匠の朱鬼であった。

Dアーチャー「やっぱりな!」

始めから気づいていたがまさか予感的中するとは。

〈響鬼〉

響鬼「着きましたよ、初春さん。」

僕は目的地に着いたと初春さんに言った。

初春「うわー！これが響鬼さんの目的ですか？」

そう僕がどうして山に登ったのかは言うまでもない。

響鬼「また、力を借りるよお願いします。シュ！」

僕は大木の枝を二つ拾いそう言った。

〈合宿先〉

僕達は何とか目的を終えて合宿先に帰宅した。

響鬼「ただいま！」

僕は荷物を玄関に置いてそう言った。

佐天「おかえり、初春！」

佐天さんが初春さんのスカートをめくりながらそう言った。

初春「ひゃあああああ！！！」

初春さんが悲鳴をあげたのは言うまでもない。

御坂「おかえり」

それにつられて御坂さんや白井さんが出てきた。

夕御飯はカレーで作ったのは御坂さんと佐天さんが作ってくれた。

〈夜〉

風鈴が風に吹かれて心地好い音を奏でた。

初春「響鬼さん」

初春さんが僕を呼んだ。

響鬼「何、初春さん？」

僕はドアに背もたれしながら初春さんに聞いた。

初春「響鬼さんはどうして戦うんですか？」

始めてそんな質問を受けた。

響鬼「誰かがやらないといけないと思うからやるんじゃないかな？」

音激棒の鬼石を木の枝に取り付けて完成と言った。

つづく

倒れる鬼 「後編」 (後書き)

戦う理由

戦い（前書き）

完成です。

戦い

〔初春〕

響鬼さんが大太鼓の前に立って作ったばかりのバチを両手に持って叩き始めた。

叩く姿はまるでプロの人が太鼓を叩いている様に見えた。

響鬼さんが太鼓を叩いて二時間が過ぎた。

初春「響鬼さん、昼食の時間ですよ」

私が大声でそう言うと響鬼さんは息を荒くしながらバチを腰に締まった。

響鬼「うん、あと少し待ってて」

響鬼さんは自前のリュックサックからペットボトルに入れて置いたお茶をコップに注いだ。

私も響鬼さんからお茶を頂きとても美味しかった。

〔合宿所〕

響鬼さんの合宿所に戻った瞬間にいきなり大雨が降ってきた。

響鬼さんがタオルケットからタオルを取り出してくれたので髪を早く乾かすことができました。

響鬼さんはお風呂の用意をと言って風呂場に向かった。

響鬼さんの普段の格好は道着か制服しか着てないような気がするな。

（響鬼）

響鬼紅の訓練にかなりのスタミナを消費してしまった。

御坂「坂本、あんたに客が来てるわよ。」

御坂さんが僕を呼びに来た。

響鬼「え？お客さんですか？」

僕の知り合いは響鬼さん以外誰もいないと思うけど。僕は玄関に行って歩いて行った。

すると玄関で座って待っていた人は轟鬼さんの師匠の斬鬼さんだった。

響鬼「ぎ、斬鬼さん!？」

僕は斬鬼さんに近づいて話をした。

内容はどうやってこの世界にやって来たか。

斬鬼さんに聞いたら目が覚めたらこの世界に来ていたと言っていた。

斬鬼「響鬼、お前紅に変身するための特訓をしているんだっけ？」

斬鬼さんは僕の方を向いてそう言った。

響鬼「あ、はい！頑張って訓練しているんですけど」

斬鬼「成る程まだ紅に変身できてないのか」

斬鬼さんは僕にそう言った。

響鬼「はい…」

まだ未熟な僕に紅に変身するのは時間がかかり掛かる。

斬鬼さんが「外に出る」と言うので僕は外に出た。

斬鬼「お前が紅に変身できるようになるまで付き合ってるよ。」

斬鬼さんは音激新弦「烈斬」を背中に背負い家から十メートル離れた所でいきなり斬鬼さんが烈斬で斬りかかってきた。

響鬼「何するんですか!？」

僕は音激棒・烈火で上手く交わしながら聞いた。

斬鬼「お前の修行の手伝いをするだけだ。」

一撃、二撃、三撃と攻撃を上手く交わしながら斬鬼さんの後ろに回り込んだ。しかし斬鬼さんは上手く攻撃を交わし僕に攻撃を仕掛けてきた。

流星は轟鬼さんの師匠。

腕は衰えていない。

そう思いながら攻撃を交わしまくる。

斬鬼さんは烈斬を地面に突き刺し変身鬼弦「音枷」を手で鳴らし変身した。

斬鬼さんは本気だ。

響鬼「僕も変身して戦うしかないか」

音角を指で鳴らし額に近づけた。

体に炎が燃え上がり仮面ライダー響鬼に変身した。

響鬼「僕も斬鬼さんに負ける訳にはいきませんからね」

音激棒・烈火を両手に強く握りそう言う僕に斬鬼さんは列斬を持ち直し攻撃を仕掛けてきた。

響鬼「あまい」

強い攻撃になれば斬鬼さんは隙が生じるためそこに攻撃を仕掛けてみた。

斬鬼さんはうまく攻撃を交わしカウンターに鬼神拳を僕に喰らわせた。

互いにまだ互角の戦いが出る。

斬鬼さんは引退してかなり経つのにまだ衰えていないようだ。

（御坂）

あいつの知り合いつて本当に不思議な奴が多いような気がするわ。

白井「お姉様、やはり響鬼さんの事が気になりますの？」

いきなり黒子が変な事を言ってきた。

御坂「な、何要ってんのよ。」

確かに坂本はかっこいいけど私より初春さんの方がなんだか似合ってる気がするんだよね。

二人の戦いを見ていると私がああのレベル0の上條当麻との勝負を邪魔した時は少しだけ腹が立ったけどあいつは自分の心配より他人の心配をするような奴なのよね。

響鬼「はあー、たあ！」

太鼓のバチで知り合いと互角に戦う二人を私と佐天さんは静かに見ていた。

初春さんは心配しながら見ていた。

響鬼「皆悪いけど、お風呂沸かしといて。」

呑気に私達にそう言う坂本に私達は了解した。

あいつが守りたい物っていったいなんなのかな。

戦っている坂本を見ながら私はそう思っていた。

（響鬼）

響鬼「喰らえ、音激棒・烈火弾！！」

炎の玉が斬鬼さんに直撃した。

斬鬼さんは2〜3m程吹っ飛んだが烈斬を握り直したが体力が限界に来たのか倒れてしまった。

響鬼「斬鬼さん！！」

駆け寄ると斬鬼さんは疲労で倒れてしまっただけのようだった。

布団を敷き斬鬼さんをそこで寝かせて風呂に入りたく僕に佐天さんが話を掛けて来た。

佐天「坂本、あのお私鬼になりたいんだ。」

意外な一言に僕は十秒程硬直した。

響鬼「えー！ー！」

それだけ意外と言うことだった。

その後話を聞いて行くと斬鬼さんが前に佐天さんを助けた時にその時の戦いがカッコよかったみたいで斬鬼さんの弟子になりたいみたいだ。

響鬼「斬鬼さんの弟子になるのは別に構わないけど斬鬼さんが何て言うかな。」

斬鬼さんの前の弟子は轟鬼さんはとても熱血な鬼だったな。

響鬼「まあ斬鬼さんの弟子になりたいなら止めなくても大丈夫かな。」

僕は佐天さんにそう言うのと佐天さんは嬉しそうに頭を下げて「ありがとう」と言った。

〈数分後〉

斬鬼さんが目を覚まし佐天さんが弟子の話をしたら斬鬼さんは頷いて了承してくれた。

その後響鬼紅に変身できたがまだ両腕と両足にしか出来ていないが少しづつ慣らしていこうと思っている。

学園都市に帰宅した僕達は何時ものファミレスに向かった。

佐天「それにしても勝人は来ると思ってたのに。」

勝人「あのな、俺まで行ったら学園都市に出現する魔化網は誰が倒すんだ？」

御坂「それもそうよね。」

皆でそう話をしながら大盛りポテトフライを食べながら話していると勝人さんは何も写っていないカードを見ていた。

御坂「ねえ、そのカードって何も写っていないけど何か意味でもあ

戦い（後書き）

コメント待ってます。
辛口で言わないでね。

変な研究者（前書き）

遅くなりました。

変な研究者

（初春）

私達はいつものファミレスで怪談話をしていた。

話の内容はとある女性が着ていたブラウスをガバツと脱いだという内容だった。

御坂「って全然怖くないじゃん。」

そう言う御坂さんに勝人さんは「御坂静かにしろ」と言った。

その内容は本当に怖くもなんともない。

だけど佐天さんは御坂さんに本当に居たら怖くないか聞いたら怖くないと御坂さんはそう答えた。

勝人「それ単なる変態だろ」

そう勝人さんは言った。

響鬼「確かにそうですね。」

響鬼さんも勝人さんと同意した。

確かに単なる変態である事にかわりない。

でもそれ以外にも変な噂がいっぱいあるけどその中には響鬼さんと勝人さんの噂も入っていた。

それを聞いた二人は少しだけ照れていた。

ゆたか「勝人君照れてるの？」

小早川さんが勝人さんにそう聞いた。

勝人さんは顔を赤くし染めてまたカードを眺めていた。

響鬼「僕買い物に行ってくるね。」

響鬼さんは太鼓のバチ置いていて何処かへ行った。

いつも響鬼さんの背中を見ていたけどどうしてか響鬼さんの顔を見ただけで心がときどきしてしまう。どうしてなのかは解らないけど響鬼さんの太鼓のバチを持って響鬼さんの後を追うとしたけど影も

形も無かった。

（響鬼）

前に勝人さんとタッグを組んだ時にカードで人を読んだけどそれ以外にも違うカードがあるのかな。僕はそんなどうでもいい事を考えながらコンビニを後にした。

とある坂道で見た顔の人が女性と話をしていた。

美琴「あ、坂本何してるのこんな所で何してるの？」

後ろを振り向くと御坂さんが後ろに居た。

響鬼「あ、御坂さん、あそこに居るのって上条さんじゃないですかね。」

僕が上条さんの方に指を指しながらそう言うつと御坂さんは上条さんの方へと走って行った。

御坂「見つけたわよ！！」

御坂さんは腕を組みながらそう言った。

相変わらず上条さんを見つけたらすぐに勝負するんだよね。

僕は呆れながら御坂さんの方を見た。

上条「よう、ビリビリ今暇か？」

上条さんは呑気に挨拶をしていた。

僕は苦笑をしながら御坂さんの後ろで挨拶をした。

上条「よう、響鬼も居たのか？」

僕は上条さんに久しぶりに会ったのでとりあえず握手を交わした。

響鬼「上条さんもお元気そうだなによりです。」

僕は笑顔で上条さんにそう言った。

御坂「それよりあんたはこんな所で何してんのよ。」

上条「俺はこの人が車を停めた駐車場を探してんだ。」

上条さんは女性の方に手を向けてそう言った。

すると女の人はいきなりブラウスに手を掛けていきなり脱ぎ始めた。僕と上条さんは目を閉じて見ないようにした。

御坂「な、何をしているんですか？」

御坂さんはブラウスを脱いだ女性に聞いた。

？「暑いから脱いでいるんだ！」

いや、そんな堂々とそんな事を言われても。

上条「と、とにかく服を着てください！！」

すると上条さんの後ろから女性の悲鳴がした。

女子生徒「女の人が男子に襲われてる。」

え、上条さんの事か？

上条さんは御坂さんに服を渡してそのまま逃げた。

御坂さんは上条さんを追うとしたが女性のブラウスを持って行くわけにはいかなかった。

御坂「とにかく服を着てください、見られてます見られてますからほら早く！！」

くある木陰く

僕達は自動販売機の近くにある木陰でジュースを奢って貰った。

？「すまないね。車を探すのを手伝ってくれて。」

僕達にお礼を言ってきた。響鬼「いえいえ、僕達は当然の事をやっているまでですから。」

僕はジュースを飲みながらそう言った。

女の人の格好からして研究者の格好だ。

響鬼「あの研究者なんですか？」

？「ああ、AIMの拡散力場の研究をしているんだ。」
その後難しい話を終えて駐車を探そうとしたら小さな男の子が走
っていたらコケてしまった。
そのせいでソフトクリームが女性のスカートにこびり付いた。
男の子「ご、ごめんなさい！」
男の子は頭を下げ謝罪した。
？「ああ、気にすることはない。すぐに洗えば大丈夫だ。」
スカートのフックに手を着けようとした。
響鬼&美琴「だから、脱ぐな！！！！」

く勝人く

俺とゆたかと初春と佐天と白井は喫茶店でお茶を飲んでいた。
黒子「お姉さまに連絡が着きませんの。」
白井はケータイで御坂と連絡しようとしたが連絡が着かないらしい。
佐天「やっぱり脱ぎ女に襲われているんですよ。」
佐天はまたそんな事を言っていた。
ゆたか「たぶんそれはないと思うよ。坂本君が居るから大丈夫じゃ
ないかな」
ゆたかがそう言うのと白井の目付きが急に変わった。
勝人「確かに大丈夫だろ。」
俺はアップルティーを飲みながらそう言った。
初春は何か調べていたのかケータイを俺達の方に向けて見せてくれ
た。
初春「佐天さん。脱ぎ女に関しての情報が出てきましたよ。」
佐天はそれを見てオーバーリアクションをした。
佐天「白井さん、脱ぎ女の情報でヤバイのがあったよ。」
黒子「何ですか？」

白井は恐る恐る聞いた。

佐天「脱ぎ女って感染するて。」

佐天が普通にそう言うのと白井の目が点になった。

白井「感染って。」

佐天「感染した人は自分も脱ぎ女になるって。」

勝人「はあ？」

俺は呆れながら佐天の方を向いた。

ゆたか「さすがに白井さんでもそんな事信じないよ。」

ゆたかは白井の方を向いたが白井はテーブルに頭を叩いていた。

黒子「イヤー、お姉さま、お止めになつて。」

白井の行動に俺は少しだけ退いた。

そんな話をしていたら外がやけに騒がしかった。

外を見ると不良「スキルアウト」が二人外に居た。

勝人「おい、白井外にスキルアウトが居るぞ。」

外に出てスキルアウトが笑いながらガイアメモリを首に押し込んだ。

「スミロドン」

「アイスエイジ」

二体のドーパントがいきなり攻撃を仕掛けてきた。

俺はデイケイドライバーを腰に装着しライドブツカーからデイケイ

ドウルフのカードをデイケイドライバーに入れた。

勝人「変身!!!」

「カメンライド…! デイケイドウルフ!!!」

俺はライドブツカーをガンモードに変形させてドーパントに向かっ

て放った。

アイスエイジ「何だテメーは」

アイスエイジドーパントは俺に聞いてきた。

デイケイド「俺か？俺は通りすがり仮面ライダーだ!!!」

俺はそう言った。

スミロドン「通りすがり仮面ライダー？」

二体のドーパントは俺を見ながらそう言った。

「デイケイド「行くぜ。」

ライドブツカーをガンモードからソードモードに変形させた。
そして二体のドーパントに斬りかかった。

一撃、二撃、三撃と連続で攻撃をした。

「デイケイド「さてと、お前らにはこのカードでいいな。」

俺がライドブツカーから取り出したのはギルガメツシュのカードだった。

「キャラクターライド…ギルガメツシュ!!」

ギルガメツシュ「ふん、久しぶりだな雑種。」

ギルガメツシュは俺を見るなりそう言ってきた。

「デイケイド「ああ、久しぶりだな。」

俺もギルガメツシュに久しぶりの挨拶をした。

俺はギルガメツシュにスミロンドーパントの相手をするように言った。

俺はライドブツカーから一枚のライダーカードを取り出した。

「カメンライド…オーズ! タトバ!」

赤と黄色と緑のメダルの様な物が俺の目の前から現れた。

「アイスエイジ「なに?」

俺はライドブツカーで連続で斬りかかった。

アイスエイジドーパントの腹部にキック攻撃を決めた。

Dオーズ「決めるぜ。」

「ファイナルアタックライド…オ、オ、オ、オーズ!!」

オーズの必殺技のタトバキックをアイスエイジドーパントに決めた。

アイスエイジドーパントは元の人間の姿に戻った。

「デイケイド「あ、そう言えばギルガメツシュは。」

俺はギルガメツシュの方を向いた。

ギルガメツシュは宝具を使いながらスミロンドーパントと互角に戦っていた。

「ギルガメツシュ「王たる俺を同じ場所に立たせるか狂犬!!」

大量の剣がスミロンドーパントに直撃した。
しかしスミロンドーパントは血を口から吐きながら立ち上がった。
ギルガメツシュ「ほう、まだ立ち上がるか。狂犬!!」
ある意味ギルガメツシュの方が有利だった。
ギルガメツシュ「こいつで止めだ!!目覚よエア」
赤色の剣を右手に持ち片手で赤い光のような攻撃でスミロンドー
パントを弱らせた。
ギルガメツシュ「おい、雑種。」
俺の事と呼んだのか俺はギルガメツシュにこう言った。
デイケイド「何だ?」
俺はギルガメツシュに何なのか聞いた。
ギルガメツシュ「後は任せたぞ。」
俺に止めをさせと言うことか。
デイケイド「おう。」
「ファイナルアタックライド…デイ、デイ、デイ、デイケイドウル
フ!!」
前から氷のカードが十枚出てきた。
俺はアイスディメンションキックで
スミロンドーパントを倒した。
俺は変身を解いた。
白井「宮沢さん大丈夫ですか?」
俺は腕を回しながら大丈夫だと言った。
ゆたか「勝人君の勝ちだね。」
俺はゆたかの頭を撫でながら頷いた。

〜美琴〜

私は今あの女の人のスカートを乾かしていた。

？「悪いね、親切にしてくれて。」

美琴「まあ、乗りかかった船ですよ。」

私は乾いたスカートを女性に渡した。

？「後あの少年にも礼を言っというてくれなにか。」

美琴「あの少年って坂本の事ですか？」

私は腕を組みながら聞いた。

？「いや、ツンツン頭の少年の方だ。」

女の人はそう言った。

美琴「え、あいつが。」

私は驚きながらそう言った。

？「ああ、困っていた私を助けてくれたんだ。」

私に教えてくれた。

美琴「へえー、あいつが。」

私は意外と言いたそうな顔でそう言った。

？「いい奴だな。彼と坂本と言う少年は。」

坂本が優しいのは始めて会ったときから知っていた。

美琴「まあ、いい加減な奴なんですよ。適当って言うかお人好しっ

て言うか似てるんですよ。あの二人は」

私は少しだけ嬉しそうになりながら話した。

？「楽しそうだな。」

女の人もそう言ってきた。

美琴「へ？」

私は間の抜けた返事をした。

？「君は二人の事が好きなのか？」

美琴「な、何を言ってるのやら。」

私は少しだけ誤魔化しながらそう言った。

？「ほら、むかし流行っただろ、ツン、ツンドラ？いや、ツンデレか？」

そう言いながら私はかなり恥ずかしくなった。

美琴「あり得ねーからー!!」

地面を強く踏んだ。

すると電撃が地面から天井の灯りが全て消えた。

私はヤバイと感じた。

女の人がトイレから出てきた。

?「何が起きたんだ?」

美琴「さあ何でしょうね。さあ行きましょう。」

私は女の人の背中を押しながらそう言った。

〈駐車場〉

ようやく私と坂本は女の人の車を探した。

私と坂本はこう思った。

響鬼&美琴(「っていつか自分の停めた駐車場ぐらい覚えとけよ。)

)

私達は今あいつのせいだと思っていた。

まあ坂本はそう思っていないんだろうけどね。

上条「ぬあー!!全滅だ折角二時間並んで手に入れたタンパク源が。

┌

あいつはお買い物に行っていたみたいだった。

〈響鬼〉

僕は上条さんが卵を落として悲惨なことになっているのを見て哀れだと思った。

その後上条さんは御坂さんが後ろに居ることに築いて御坂さんがいきなり決闘をしなさいと言った。
まあもちろん勝ったのは見た限り上条さんだったけどね。

つづく

変な研究者（後書き）

どうだったでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7421s/>

とある科学と音激道

2011年12月30日03時52分発行